

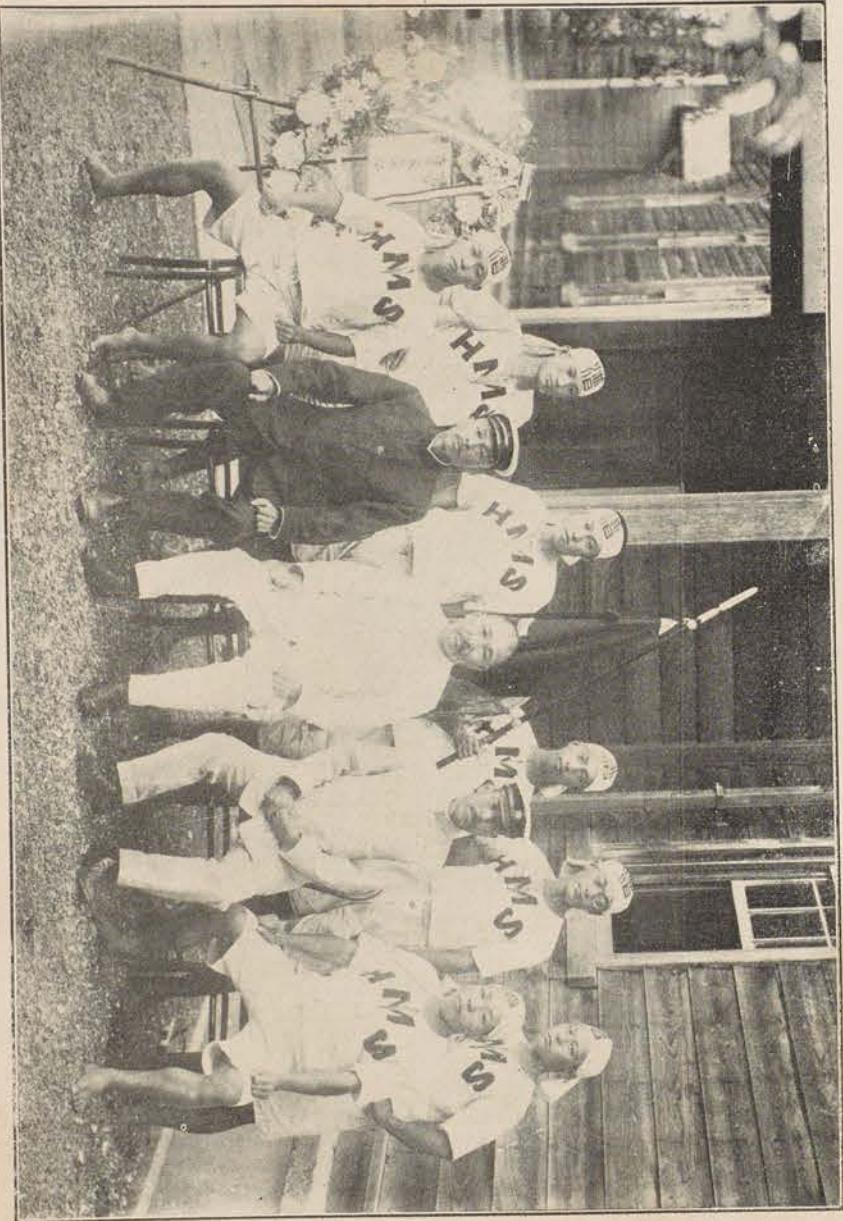
大正十一年三月

滋賀縣立彦根中學校校友會
圖書館

校友會雜誌

號壹拾參第貳卷

滋賀縣立彦根中學校校友會



影撮念記勝優會大漕競艇端 催主部樂俱艇漕國際

畏くも我が東宮殿下には、稀世の英資を以て夙に海外視察の鴻圖を抱かせ給ひ、去歲桃花の佳節をト
し御召艦香取に御便乗、數多の供奉員を從へさせられ、鵬程万里の波濤を蹴つて御渡歐の途に就かせ給
ひてより、正に半歲、其の間我が同盟國を始め佛白蘭伊の諸友邦を歴訪視察遊ばされ、半歲に亘る長途
の御旅行にも拘らず、玉体常に御健かに、去る九月三日を以て一路平安横濱埠頭に還啓あらせ給ふ。鶴
駕東都を御發輩遊ばされてより、日夕神佛に祈願を籠め、鶴首此の日あるを待ち奉りし七千萬國民の歡
喜何物か之に加ふべき。

伏して惟みるに、殿下今次の御外遊は振古未曾有の盛儀たり、而して殿下の聰明にして謙抑なる、最
も意を外交に注がせ給ひ、各友邦を御歴訪遊ばされ、御親交更に一段の厚きを加へられし一面、隨時に
官民と隔意なき交揖を遂げさせられ、我が國際的地位を高め給ひしは申すも畏し、又よく觀光に留意せ
られ、政治に軍事に産業に親しく歐洲文化發達の狀況を御視察遊ばされ、以て異日萬様を親裁し給ふ時
の御準備に資し給ふ。若し夫れ仁慈の徳に富み給へるを稱へ奉らんとあらば、此の行し隨處に其の迎例
を見出し奉るを得べし。其の徳業の宏大にして收得の豊饒める、寔に筆舌の能く盡す所に非るなり。我
等何の幸で此の國に生れ、今や殿下攝政治下の民として日夕其の廣澤には浴しつゝあり。豈其の身の光
榮を思念し、學に業に益々勵精し、以て皇國の遑運に寄與する所なくして可ならんや。
茲に本誌を割闇に附するに當り、曩日本校が此の曠古の盛儀を記念すべく生徒に課したる奉迎文中の
佳作を選し、之を卷頭に掲げ、謹んで殿下が御無事御歸還遊ばされしを祝し奉る。

校友會雜誌 第二卷 第三十一號



賀詞

東宮殿下の御歸朝を祝し奉る

第五學年甲組生徒 安食鳳麟

皇太子裕仁親王殿下には、大正十年三月三日桃花雛壇に誇るの日、横濱灣頭香取艦上に皇太子旗鮮かに翻へし、供奉艦鹿島を從へ、威風堂々逆巻く波濤を蹴つて鵬程萬里御渡歐の途に上らせ給ふ。爾後約半歳、英佛白蘭伊の諸邦を御歴訪ありて、親しく各地の文物、制度、風俗、教育等全般に渡り御見學相成り、各國の元首、有職知名の人士と密かに御交際遊ばされ、日數一百八十有五日、行程實に貳萬三千餘浬の前代未聞の大旅行を茅出度く了へさせられ、而も玉体には何等の御障りもあらせられず、至極御壯健に渡らせ給ひて、御豫定通り九月三日を以て、秋風颯々たる横濱棧橋上に再び御英姿を拜するを得

たるは、両陛下の御喜びは申すも畏し、我等庶民一同の歓喜措く能はざる所なり。

伏して惟るに、我が國に於ては、天孫降臨以來二千五百八十年未だ曾て 天皇皇儲の雲井奥深きを出でさせられ、八重の潮路を凌ぎて遠く海外に御巡遊ありし事絶ゆてなし。然るに今や我が日嗣の皇子裕仁親王殿下には世界に赫々たる我が青史に一新記録を劃し給へるなり。されば御出發以來、全國民舉げて其の御無事御安泰を祈り奉り、日々新聞紙に依り其の御動靜を拜察し奉りしなり。此の間殿下には終始御機嫌麗々しく、熱誠を籠めて御歓迎申上ぐる各國の、上は皇室より下官民一同の間に立ちて、至極裕達且平民的の御行動を取らせられ、我が日の本つ國の皇儲としての威容を保たせられしは、一に殿下の天資英邁に渡らせ給ふ御性格の然らしむる所なるを拜察し奉り、且つ將來かゝる英主を戴く我が國が益々他國に對し國威を發揚する事を思へば、我等其の下に生を全うする日本國民たる者は、滿腔の赤誠を捧げ以て殿下に感激拜謝禁する能はざる物あるなり。

あゝ熾なる哉我が國威、幸なる哉我が國民。唯々吾人は殿下の御歸朝を祝し奉り、聖壽御運の彌榮に榮に榮にまさん事を祈り奉るのみ。

皇太子殿下御歸朝に際して

第五學年乙組生徒 樋 口 幸

皇太子殿下には臘程二萬哩に亘る歐洲御巡遊を恙なく了へさせられ、九月三日を以て御歸朝あそばされたのは萬民の最も慶賀に堪へざる處である伏して惟みるに山翠滴らむとする間に馥郁たる紅桃の花の燃ゆる三月三日の良辰をトし、國民の萬歳聲裡に軍艦香取に御坐乗、供奉艦鹿島を従はせられ、威風堂々として鹿島立たれたのである。殿下は長途の御航海に何等のお障りもなく最初同盟國たる日不沒の英國を御訪問あそばされ、英皇室及び同盟國民の最善を盡せる御歓待を受けさせられ、日英兩國の友情を益々深くなされ給ひしは寔に恐惶の至りである、殿下は佛白蘭伊の大統領皇室各諸國民の熱烈な歓迎を受させ給ひつゝ、彈丸煙硝の黑白も知れざりし、未だ血の乾かざる西部戰場に玉歩を運ばせ給ひ、無名の戦死者に花輪を手向けさせ給ひ、又著名の顯士と平民的な御交際あそばされ、未來の貴き地位の御修養をつませられしは人類福趾の極みである。

殿下の御音聲の響きし山野、玉歩を運ばれし河海は、殿下の御高德に感泣したことであらう斯くの如き御巡遊は外國人に對し好印象をあたへられたのみならず、又外交上にも好結果をもたらされたにちがひない。月日は荏苒とすぎ、天高く氣清く、空に纖雲すらなき九月三日、何等の御障もなく滿艦飾を施せる幾多の軍艦の皇禮砲は段々として海を壓し、晏天に飛翔する六機の飛行機は高く或は低く爆音勇ましく敬意を表する中、九時に及びたるとき、秋風に翻る皇太子旗の立つ香取艦が、堂々肅々として横濱埠頭に入り來れるとき艦上に殿下の御英姿を拜したる國民は、感泣に咽んだことであらう。鶴鳴は國

民の萬歳裡に御歸朝あそばされる對内對外に十二分の御成功を修められたのを滿腔の誠意を以て祝する
と共に、併せて謹みて皇祖の萬歳を祝し奉る

東宮殿下の御歸朝を祝して

第五學年丙組生徒 樋上亮一

殿下が三千年の舊慣を破つて、未だ例ない万里の波濤を越え給うての御巡遊に就て、境兆の心裡に一片の暗影を投する者もあつたが、これも殿下の玉体を案じ奉る至誠の表現であつて、今や赫く天日と共に消え失せたのである。殿下の雄々しき鹿島立ちを御見送した我々はお祝ひを申し上げると共に一路平安におはしませとお心からお祈りしたことであつた。

現下の國勢に照し、未來の國運を考へて我々は日嗣の皇子がやむことなき身を以て、海のかなた波の花さく異國にあらせられるのを忍び奉つる毎に、それは重苦しい歎びであり、又感佩の至りであつた。併しそれもやがて半歳にして玉体恙なく御歸還あらせられし今から考へて見れば、秋日の如く朗に晴渡つた輝やかしい喜びである。

或は英、或は佛その他各國に於ての御動靜を新聞紙の記事なり寫真なりで伺ひ奉つて、我々はこの聰明なる天方的御才智と、宇宙の何物をも屈せしめる偉大なる御威徳とに對して、未來の幸福をしみぐ辱く思ふのであつた。

殿下が華やかな西歐に於て異國の人達を驚嘆せしめられたその御外交を、深謝なる御見學の數々は、必ずや今後一天萬乘の帝位に即かせられ時に少からざる御参考ともなることゝ恐察し奉る次第である。横濱埠頭の朝靄を破つて堂々その威風を表した御召艦の甲板上に、我々の歓聲に微笑せられたる殿下と、陸上に於て、埠頭に驛前に奉迎する境兆の國民と文武百官の感激の緊張の中を、獨り光玉の如く輝き給ふ殿下を偲び奉るに、我々の喜は譬へんに物もないのである。草深き田舎より、謙んではるかに殿下の御歸朝を祝し奉る。　（完）

皇太子殿下御外遊記

第四學年甲組生徒 野口正藏

我國未曾有の御盛事として、東宮殿下には去る三月三日香取鹿島の二艦を從へられ、横濱の埠頭を御解纜になり、長途の御旅行の途に上らせられたが、少しの御疲れの御様子もなく、九月三日無事御歸朝遊ばされた事は、我等日本國民の等しく歡喜する所である。

此の御外遊は、殿下の御見聞を御擴めになつたばかりでなく、御立寄の國々との國際關係を一層親密にせられた事も亦非常なものであつた。殿下の赴かせられる所、等しく熱誠なる歡迎を申し上げ、殿下

は此等に答へらるるに殿下御特有の平民的御態度を以てせられ、殿下の御人氣は又非常なものであつた。殿には又御航海中炎熱焦げんばかりの印度洋上にも、紅海の海上にも、常に供奉員と共にデッキゴルフに打興じられ、或は群書を涉獵せられ、諸種の事項の御研究に余念なく、非常なる御元氣に渡らせられたと承はる。

地中海に出でられてはマルタ島を御訪問になり、我が忠勇なる海軍軍人の地中海上に奮戦し、名譽の戰死を遂げた無名氏の碑を拜せられ、當時の模様を想像せられてか、少時は暗然として佇立して居られた。是を拜した供奉員誰一人として顔を上げ得たるもの無かつたと言ふ。此の一事當に殿下の御高徳を推察し得て充分なのである。

それより英國ボーツマウスに御入港遊ばされた。この時の英國の歡迎は又未曾有のものであつた。その時一つ面白い出来事が起つた。と言ふのは倫敦のチャーチタイムスとか云ふ新聞に、次の様な事が書かれたと言ふ。今御訪問中の東宮殿下は實の殿下ではない。何となれば日本の皇太子殿下は神様の如く崇められて御出になるのであるから、あんな平民的な御交際はせられる筈がないと言ふのである。實に馬鹿氣な事を書いたものだけれ共、それが一度は、大部分の人に信じられてゐたと言ふのだから、

殿下の御交際振りも略これにて推察し奉ることが出来るのである。又倫敦の在留邦人會に御出席の際の如きは、其の御座上の御演説に、殿下御自身を私と言はれ、邦人の事を諸君とお呼びになり、

最後にさよならと言はれたと言ふ。是から推しても大体は想像出来るのである。それより佛、蘭、伊、白の諸御訪問になり、其等諸國の著名の人々と親しく御出會になり、御見聞を擴められ、又其等諸國との親密の度を尙一層増された事は、我等國民のひとしく恐懼に堪へない所である。

長の御旅行も遂に首尾よく終らせられ、去る九月三日午前八時無事横濱埠頭に御到着あらせられた事は、我等國民の歡喜に堪へない所である。恭しく思ふに、從來我國は國民と皇室とが離れ過ぎて居た。而して皇族の御方々の民情御視察の如きは、我國內では不可能な事であつた。然るに今回の殿下の御外遊は從來の舊習を打破せられた。上海の中華日報の如きも、今回の殿下の御外遊は、日本の無窮に不可思議な、而も到底外人の度り知るべからざる皇室を世界に紹介せられ、又日本國民と皇室との關係を一層親密にならしめたと言つて居るさうである。今回の殿下の御高徳の致す所であるけれ共、又日本の發展と言ふ事も多少は因をなして居るのである。日本國民たる者宜しく自重して然るべしである。

最後に殿下の將來益御健勝にましまさん事を祈りつつここに謹んで筆を擱く。

東宮殿下の御外遊について

第四學年乙組生徒

牧 村 祐 玄

我が皇太子 裕仁親王殿下が、畏くも金玉の御身を以て、本年三月三日以來二萬海浬に餘る長途の御

巡遊中、英、佛、白、蘭、伊の五箇國を始め、羅馬法王廳等數多の都市を御訪問遊ばされ、御見學としては、最も有益なる御經驗を積ませられたこと、及び二千五百有餘年の光輝ある歴史を有する我が國は、常に外人より多くの興味を以て、注目せらるゝところなるが、殊に今回の御壯圖に際して、彼等が衷心より悦びと、敬意とを表したことは、將來の我が内治外交の上に、著しき影響を齎すものと思はれます。

即ち殿下の御旅行は、僅に六箇月に過ぎず、而も其大部分は、海上に過させ給ひしが、僅少の時間を巧に御利用遊され、歐洲諸國の文化發達の狀況及び、大戰の遺蹟等を親しく、御視察あらせられ、且は又是等諸國と本邦との親交關係は、いよ／＼敦厚を加ふるに至つた事は、國運發展の爲にも、世界平和の爲にも、必ずや好結果を擧ぐるに相違ありません。

殿下が御歸朝の日に内閣總理大臣に下されし御令旨にも、

惟フニ我ニ國粹ノ精華アリテ固有ノ特長ニ屬ス然レトモ我國ノ宜ク他邦ニ學フヘキモ亦尠カラス予冀クハ國民ト共ニ維新ノ宏謀ニ則リテ今後益々奮勵シ彼ノ長ヲ取リテ我ノ短ヲ補ヒ國運ノ隆昌ヲ期シ世界文化ノ發展ニ資シテ以テ 皇上陛下ノ聖意ニ副ハムコトヲ

とあります。

翻へつて考へますに、此度殿下が宏く知識を世界に求めるとの、先帝陛下の叡旨に基き、遠く歐洲文明の精髓を御體驗あらせられ、異國の風土にも侵され給はず、炎熱の航海にも惱ませ給はず、却て御体量まで増させ給ひて、去ぬる九月三日、御機嫌うるはしく御歸朝遊ばされたことは、恐くは皇祖神明の靈威の、加佑し給ふところであります。かゝる尊き天佑の皇國に、生を享け、天資の令徳を具へ給ふ東宮殿下を仰ぎ得る、吾々は何たる光榮でありますや。

吾等青年たるものには之れに、感激して益々發奮し、以て有爲の人材とならんければなりません。

皇太子殿下の御歸朝を迎へ奉りて

第四學年丙組生徒 伊 藤 基 次 郎

東宮殿下此度の歐洲御漫遊は我國の歴史上に於て一新紀元を劃する重大なる出來事と考へる。丁度今から五十年前に行はれた岩倉、大久保兩公の一行漫遊が明治の維新を意味する所れば、東宮殿下今回御漫遊は大正の維新を語る所ひ得るだらう、前の一行為歸つて来て、日本の維新が始めて實現されたのであるが、これは内部的改革であつた。今度の東宮殿下の場合は、左様ではなく對外的維新と言はねばならない。

なほ、岩倉公等一行の漫遊と今回の御漫遊とを比較し對照すれば、實に隔世の感がある。

岩倉一行の時代は、日本は未だ少しも世界に對して知られてゐなかつた、未だ日本は智的方面に於て又物質的方面に於て、何等誇るに足るべきものをもつてゐなかつた。歐洲諸國から未開野蠻の國と思は

れてゐても致方がなかつた。無論今日の如く汽もなく汽車船もなかつた、交通機關の最大なるものは駕籠位であつた。然るに、現在の日本は、凡ての点に於て、歐米と殆んど遜色なき迄に進歩して來て居るが、實に五十年間に於ける我國の進歩發達の著しき事には、何人も驚かざるを得ない事であると思ふ。今回の御外遊の一端を見るに、到る所、多大の歓迎を受けさせられたと承つてゐる。彼の地よりの報道を見るも、如何に歓迎の盛大を極めたかを窺ひ知り得るではないか。

今度の世界大戰に於て、歐米と殆んど遜色なき迄に漕ぎ着けたのも、世界戰亂が關係してゐる。日本は從來は二流、三流國から一躍して英米佛と同様に伍班に加はり、世界列強國の一となり固より戰前に於ても、一面日本は列強の中に任してゐなかつたのではなかつた。八列強と云はれに事もあつた。併しこれは名のみで、實がなかつたと言ふても宜しからう。然るに今度は其の様ではなく實質に於て強國の一と呼ばれるゝに至つたのである。

而して過ぐる國際聯盟會議に於ては、日本を加へた五列強がその聯盟の幹部となつた、而して今や日本の軍艦がトルコに浮びて、國際聯盟の監督を委任せらるゝ如き光榮ある狀態となつた。

斯の如くにして、今や世界的國家となるに至つた折も折、東宮殿下が歐洲に御漫遊になつたのであるから、彼等が非常な歡喜を以て、東宮殿下をお迎へになつた事は當然と云はねばならない。自分は大阪毎日新聞が齋らした處の東宮殿下の御動靜を撮影した活動寫眞を見た時に感激に堪へなかつた。

斯くの如き諸國に於ける盛大な歓迎は一は東宮殿下御自身の御聰明に依り廣酬宜しきを得させられたのにも因し、又外國の諸國民が殿下の御人格に對して敬慕し奉りたる餘りの結果である而して又一面日本の國威が然らしめたことを考へねばならない。

明治維新に於ける大業は、何人も知る如く、明治天皇が名君にあらせられた爲であるが、しかし天皇を輔翼し奉つた人物も少なくはなかつた。其處で大正の維新即ち對外的維新たる日本が國際的地位を具へた今、

東宮殿下に對して輔翼の任務を致すべき人々は誰か
是れ現代青年各々自らの任務ではないか、必らず青年である、

吾々は現在の老人に代つて將來の君主たる東宮殿下のために一寸も盡し奉る事を忘れてはならない

皇太子殿下の御外遊

第三學年甲組生徒　正　野　敏　次　郎

大正拾年九月三日、是我が皇太子殿下が御無事御外遊終へさせ給ひて、再び故國の地を踏ませ給ひし日なり。顧みれば、去ぬる三月三日、畏くも金枝玉葉の御身を以て御渡歐の途に上らせ給ひ、千里の波濤を渡り、英、佛、伊等の諸國に赴かせ給ひ、珍らしき光景を眼にし、不思議なる語を耳にし、或は戦趾

に、或は學校に、或は寺院に實歷し、且現代世界的の偉人、英雄と談話を交へ給ひ、大いに學問を擴め給ひて、今茲に御歸還あらせ給ふは、是れ啻に我國民の悅のみならず、感涙禁せざる次第なり。

今日軒毎に國旗を翻し、或は歡迎門或は提灯行列と老も若もひたすらに祝し奉り、萬歳の聲かまびすしきは、殿下が御高徳を痛く國民の敬慕したるの結果と拜察し奉るを得べし。

殊に到る處、我國威を發揚し給ひ、國交を更に親密にし給ひしは、新聞寫眞等にて、よく拜察するを得べく、且貧民に金を與へ給ひ、あはれなる病院のベッドに横たはれる少年に握手し給ひし等、其御心情の如何に暖に渡らせ給ふかを恐察する次第なり。我等國民たる者豈感泣せざるべけんや。

尙殿下的御賢明なることは申す迄も無く、皇帝名士等に對しての應接振の御上手なること、又殿下的御見學に對しての御意見の明かなるは、供奉員達も驚かれたる程にて、英國某新聞に驚歎すべき皇太子と戴せ奉りしどのことなり。

又御勇敢に渡らせられ、如何なる人の前にも恐れず、談話を交へさせ給ひ、殊にロンドン市民の前にて、歡迎に對する答辭を讀ませ給ひし時の如きは、御聲朗々として、日本文にも關らず一同解したる如き心持になれりとかや。

此の如き御心情の暖にして且御賢明なる方を、將來の君主として戴く我等青年は實に幸福なり。豈我等生徒たる者大いに勉強し修養し以て他日有用の材となり、上下一致國運發展に盡すべく覺悟せずして可ならんや。

東宮殿下之御歸朝と我等之決心

第三學年乙組生徒 北 村 省 三

顧みれば去る三月三日、凜として去りやらの春寒を冒して、奮然起つて渡歐の途に上り給うて以來、是に満半歲の長日月を経た。是の間殿下には歐洲各國を御歴訪遊ばされ、或る時には知名の政治家、軍人、學者等種々の人々に御接見になつて、其の人々の談論を御傾聽遊ばされ、或る時には文藝産業の實況を親しく御視察、或は慘憺たる大戰の跡を御訪になり。益々世界平和の切要であるの感を深くせられた等、あらゆる方面の御視察、御見學を遊ばされて大いに御見聞を擴め給うたばかりでなく、列國との交誼を温め、國威を御發揚なされ、國際上の地位を高めさせ給うた等、無限の御功績は我等七千萬同胞の齊しく感激に堪へ得ぬ次第である。今や萬里の御外遊も、何の御障もなく、益々御健勝に、終へさせ給ひ、御歸朝遊ばせられた事は、我等國民の欣抃して掛けない所である。

此の長い御旅行におかせられて、殿下には公私の儀式交際、應接等數限りなく、御心身の御疲勞も如何ばかりであつたであらうか。如何にして我等の想像が及ぶ所であらうか。

然るに殿下には、御歸朝の當日から高輪御殿で、文武公私諸人の參賀を受け給ひ、翌日は夙に御起床

遊ばされて宮中賢所に報告の爲御參拜あらせられ、直に日光に行啓、両陛下に御對面、引續き東京へ御還啓の後は、東京市民の奉賀會に臨ませられ、九日には東京を御出發遊ばされ、順次伊勢神宮、畝傍、桃山の各山陵へ御參拜の御豫定と拜聞し奉る。

斯の如く殿下には御多忙又御多忙で、御席の温まる御暇もあらせられぬ御事と拜察し、恐懼に堪へない次第である。殿下御歸朝勿々この御精勵を拜聞して、我々一般國民は何と感すべきであらうか。唯玉躰の御健康を案じ奉るばかりでよからうか。御歸朝其の日から御疲勞も厭はせられず、御自身の義務と天職に一寸の御暇もなく、御精勵あつて、範を萬民に示し給す、其の有難い思召を腦底に刻み込んで、我等國民は一心に各自の本分を盡すことに奮勵努力して息まぬことを誓はねばならぬ、否實行せねばならぬ。此れこそ殿下に對してばかりでなく、両陛下並に御歴代の、高祖高宗に對して御報ひ申し上げる唯一の手段に違ひないと信するのである。

貴重なる御経験

第三學年丙組生徒 小川孝一

本年三月三日横濱埠頭より御發途あらせられた我が皇太子殿下には、先づ以て英國を御訪問あらせられ、次で佛蘭西、白耳義、和蘭及伊太利の諸國を御歴訪遊ばされ、前後半歳に亘る長途の御旅行なるに拘らず、些かの御障りもあらせられず、益々御健かに渡らせられて、愈々九月三日を以て横濱埠頭に御安着遊ばされたのは、誠に衷心より慶賀の意を表する次第である。

元來我國の歴史の上で、皇太子殿下の海外御巡遊と申すが如きことは、未だ嘗て先例のない壯圖であるから、我等七千萬の同胞は皆殿下の御安泰を御祈り申し上げて居つたのである。然る所始終御機嫌麗はしく海陸の御旅程を重ねられ、而も御歴訪の歐洲諸國では、何れも官民一同熱誠を籠めて御歓待申し上げ、殿下に於かせられても御満悦に渡らせられたと洩れ承つて居る。

就ては殿下に於かせられても、今回の御外遊は、歐洲大戰の跡と、戰後國運の回復に努めつゝある各國民の苦心とを御視察遊ばされ、此の上もなき好機に際會遊ばされて、性來御聰明に渡らせられる殿下今回の御見學が、將來の君主としての御修養に寄與する處は、多大なる事と恐察する次第である、尙更に國民の記憶して置くべきことは、歐洲諸國と我が國との國際交誼上に及ぼされた影響の偉大なことである。吾々は此の御偉績に對し只管感激の外はないのである。顧ふに我國は、三千年來牢として動かざる尊嚴無比の國體を有し、殊に明治維新以後は國運殷々として日に月に進み、今や五大強國の班に列し、世界平和の維持に貢獻しつゝあるの秋に際し、御聰明なる殿下が、親しく海外へ御渡航遊ばされ、列國との交際に一層の親善を加ふるやう御盡力あらせられにことは、吾々國民の感佩措く能はざる所である。

賀詞

前述の如く、我が帝國の粹美を體現せられ、友邦との交驩和親に盡されて、芽出度く御歸還あらせられた殿下に對し奉り、學生、生徒、兒童は勿論のこと、國民一同滿腔の赤誠を捧げて御祝意を表し、且御奉迎申し上げる次第である。

東宮殿下御歸朝を奉祝す

第二學年甲組生徒 上橋金藏

青史に瑤珞を溶きて誌さる可き、大正十年三月三日、英邁至仁に渡らせ給ふ我が皇太子殿下には、英風颯爽として鵬程萬里遠く渡歐の途に上られました。

殿下今回の御外遊は、誠に有史以來未曾有の御雄圖にして、其の將來に及ぼす影響の重大なるは申す迄も無く、殊に戦後人心の安定を缺ける諸外國に向はせらるゝ事とて、國民は心より一路の御平安を祈願し奉り、御旅行先よりの公報私報を待ち詫び、一風一雨にも尚胸を躍らせて御安否如何と、御案じ申したのであります。

然るに稜威八紘に浹洽すれば、赴かせ給ふ所瑞雲靉靆たらざるは無く、御訪問の列強上下舉つて熱誠なる歡迎をなし、殿下亦一々之に應酬せられて限無き好印象を國々に殘させ給ひ、國際的交驩に空前の成功を收められ、祝砲の轟萬歳の聲ごよめく九月三日、半歳の長途恙く御歸還遊ばされました。

此の日七千萬の赤子は、悉く無前の盛舉を祝賀し、提灯行列、旗行列或は、神社に參拜し、津々浦々に至る迄至誠丹心滿腔の喜悅を以て御召艦香取を歡迎しました。而も、從來に倍する御健康の御姿を拜する事を得ましたのは、洵に天佑の致す所と、吾等臣民歎天喜地御悦び申し上げる次第であります。

恐縮ながら兩陛下の御満足如何ばかりかと拜察し奉つては、感極まつて言ふ所を知りません。かけまくも畏けれども東宮殿下には、益々春秋に富ませ給ひ、此の千載一遇の御盛運に遭遇せし我等の幸福何物か之に加かう。

生等向後一層修養に志し、殿下今回の御外遊を龜鑑として、萬里の波濤を越にて世界に雄飛し、益々國光を發揚して殿下の御誠意に奉答し得る様、奮勵自強して息まぬ覺悟であります

皇太子殿下御歸朝に臨みて

第二學年乙組生徒 東岸正太郎

有史以來の盛儀を祝し奉る感激と熱誠とに満ち満ちた國民の誠からなる萬歳の聲を後に、御召列車は音もなく徐かに動き、萬里の波濤を越えて光榮の旅路に赴かせ給ふ我が皇太子殿下を、帝都の外に送り奉つりしは、我等臣民の永久に記憶すべき梅の花愈々芳しく櫻の蕾正に妍を競はんとする彌生三日の朝方なりき、以後六箇月に亘りて東宮殿下に於かせられては、我が同盟國なる英國を始とし、佛、白、蘭

伊、の諸國を親しく御訪問遊ばされ、到る處國民に好印象を殘されて、氣候風土の變化にも何の御障りもあらせられず、體重さに増させ給ひて、御機嫌殊に麗しく新涼の氣清々しき長月三日、津々浦々に轟く歓呼の聲と共に迎へ奉りし我が國民の喜何物か之に過ぎん畏滿腔の赤誠を捧げ御祝意を表し奉る次第なり畏くも金枝玉葉の御身にて、半歳に及ぶ御外遊は、國交上多大の功績を擧げられしのみならず、世界文化と平和に於ける最も偉大な人格者たる事を示され、他日陛下として萬機を御親裁あらせらるゝに必要の爲、異國の文物、制度、風俗等を御見學遊ばせんとする御目的を無事果し給へりあゝ豊榮昇る日の御國の皇太子殿下が、御領内に日没するを知らざる英國の皇太子殿下と互に暖き御握手をなされし此の一場の光景こそ、將來に於ける總ての惡魔的の思想は雪の如くに消え失せ、眞の意味に於ける完全なる共通的生活が、白人種といはず、有色人種といはず、總ての人種に於ける世界同胞の花は今正に開き、世界兄弟の果實は美しく結實されたるなり。

あゝ此の偉大なる事業こそ、庭園に立札し給ひて、自分は洋行するのだと宜はせし東宮殿下の御幼時の反響に異ならず。あゝ空文に等しい國際聯盟の中にも始めて活動すべき生命が造られ、四海兄弟は目前に光榮ある光を輝かせり、

此處に包みきれざる此の歡喜を寸緒に表し、心靜かに代々木の御空に向ひて拜禮せり。

東宮殿下御歸還に際して

第二學年丙組生徒 藤野豊三郎

海外何百里の長途の御見學を了へさせられた我が東宮殿下には、當三日御恙なく横濱港に御歸還あらせられました。

新聞紙によるご、殿下には最早御學問所にて、高等程度の普通教育を了へさせられて、更に憲法、國際法等の、専門の智識を磨かせられる御豫定であつたのであります。然るに此れより先きに、將來萬乘の尊位に即かせられる上に海外の事情に通する必要ありとの御思召によつて、去る三月三日桃の節句を期して、萬里の波濤を蹴つて御勇しく御見學の途に上られたのであります。何んと云ふ勇しい事でしやう有史以來の御壯圖だと申上げるより外はありません。而も此の御壯圖は殿下の御智識を博めさせられた以外に或は英國に、佛蘭西に、或は伊太利に、親しく御交際を廣め、國際間の事業に對して、一方ならぬ御力を盡させられたるは、私共國民たるもののが、深く深く感激せずには居られましやうか。

智能啓發の教育勅語は十年の後二十年の後、何千何萬年の後までも、私等國民を將來平和の世に導いて下さるでしやう。私等國民は此かしこき御心を拜するだけでも、恐れ多いではありますか。

其の上此の度東宮殿下には、親しく美しい模範を私等國民に御示し下されたではありませんか。

自己の利益ばかりを望んでゐる今日の私等國民行爲を、何んと申し上げましやうか、唯々恐懼するばかりであります。

目覺めよ大和國民よ。報國盡忠の四字は私等の頭に何時も何時も宿つてゐますぞ。

冷しい秋が來ました。虫の泣く秋が來ました。四季の中で一番好きな秋が來ました。此の善いシーズンを見逃さぬ様に、相誠め相誨へて殿下の御思召に副ひ奉る様に、努めましよう運動に！勉強に！

東宮殿下御外遊お迎へ給ふ

第一學年甲組生徒 後藤彌一郎

我帝國民の老も若きも、皆東宮殿下の無事御歸國を神佛にいのる、その様は實に我が身命を殿下にさげたる様である。其の殿下出發後、六ヶ月の長月ををへ、御つゝが無く臺灣海を通過され給へるを聞き人々は如何程喜んだ事であらう。其の後新聞のくるのをもごかしと、待ちわびて殿下の無事を喜ぶのである。其の日を後に早九月一日となつた、殿下は無事に東京灣内に御歸りと聞き又見て臣民は如何に喜んだ事であらう、そは又筆に書きつくすことも出来ません。明れば九月三日空はよく晴れて、御歸朝を歓迎するに、相當した天氣と、民は皆喜んだ。

我が東宮御所に入らされるや、日光におはす両陛下の御壯健な天顏を拜せられ、後日伊勢に參で給つた。國民は其壯健な身體を見て如何ばかり喜んだ事でしやう、又其の人々の喜びの中にも我等田舎者はたゞ車内の殿下に向ひ萬歳の聲一つをさゝげたとは、何んたる嬉しい事であらうと思はれるが、其の聲の中には、今上天皇陛下の御健固をいのると共に、東宮殿下の御榮とが、臣民の一一致した心の唯一つの萬歳にこもつてゐる事で有りましやう。

あゝうれしい九月三日はうれしさが満つ

殿 下 御 歸 國 の 感

第一學年乙組生徒 富永志賀三

今年の三月、皇太子殿下御外遊の爲に、御出かけになつた、而して約半年の月、「御歸國」と云ふ事が、學校新聞に示された。大勢の群集の中から、明日の、授業の缺ける事を喜ぶ者が有つた。僕も其一人であつたが、それよりも、もつと喜ばしい事が有るのである。それは、何であるかと云ふと我が皇太子殿下の御歸朝の事である。たゞ一言にさう云つてしまふと、左程にも感じないが、若し「名は知らないが、何處やらの皇太子殿下が、或國の一青年の爲、一命を落さんとなつた。其の様に我が皇太子殿下がなられたら」と、色々と心配をして居たのだもの。…………

僕は思った「若し、其様になられた場合にはと考へるど、我が國は、今度の天皇を、ごなたにしやう

等、あちにもこちらにも、論が起り、必ず亂れる。」と、

僕はその一事でも大變嬉ばしいのである。

「はゞと、思つてそこらを見渡すと、さしもの群集も、今は一人の影も見はない。それから僕は、今迄の事をあれかこれかと考へ、嬉びながら遊んで居た。一時間、二時間、四時間の授業が終つて、僕は歸つた。途中「かんく」と照り渡るお日さんは、僕のその嬉ばしい心をよろこび迎へてくれる様であった。嬉ばしい心が一層嬉ばしくなつて、今日は復習も能く進んだ

殿下の御歸朝を祝ひ奉る

第一學年丙組生徒 榊 原 春 三

本年三月我皇太子殿下には、歐洲御見學の爲、萬里の旅程に上り給ひ恙なく其の目的を達せられ、秋風立ち初むる九月三日、芽出度く還啓遊ばされた。此の日熱誠なる國民の奉迎を受させられた我等國民はさきに殿下の御前途に對し奉り、只管其御旅行の幸多からんことを祈り奉つたのであつた。今その甲斐ありて、斯る麗しき御英姿を迎へ奉ることの出來たのは我等人民にとり歓び此の上もない。抑々我が國に於て、天津日嗣の大子を以て、御渡歐あらせられたるは、殿下を最初となすのである。此の芽出度

き日を、記念となし我等七千萬同胞のは、幾千歳の後迄、限りなき國體と共に、此の殿下の萬歳を祝し奉るべきである。



The following has been selected from the compositions made during the class hour in commemoration of the crown Prince as safe return to Yokohama from his tour of Europe.

K. Ukyo, 5 B.

It gives me great joy that His Highness the Crown Prince has safely returned to Yokohama port, after visiting England, Belgium, etc.

His Journey may not only help to bring peace to Japan and other countries, but also may help much in regard to foreign affairs.

E. Kishida, 5 B.

The visit of our crown prince to European countries will bring Japan into a close relation with other nations, and benefit greatly our diplomacy.

Y. Ohashi, 5 B.

I havd always heard that H. I. H. the Crown Prince is very clever, and his journey to Europe has proved that this true.

He left Japan on March 3rd and after a trip to Italy, England, France, etc, where he received a hearty welcome, he returned home.

His tour has given an ardent satisfaction to foreign peoples and also some good result in connection with the Japanese diplomatic policy.

Y. Tanaka, 5 c.

Our Crown Prince left Yokohama at 11 o'clock on the morning of the 3rd of March on board the Katori. After a long voyage he arrived at Portsmouth and on the same day he started for London, accompanied by the British Crown Prince.

While he was staying in England, France, Belgium, and Italy, he received hearty receptions.

4. A. Noguchi.

In Egypt, when the Crown Prince was viewing the Pyramids and Sphinx, the wind blew severely and rolled up the sand, but the Prince said cheerfully, "The more violent the wind blows, the better I feel, for I can get a good chance to see what the desert is like."

Since H. I. H. the Crown Prince had gone abroad on March the 3rd day and night we have been apprehensive of his health. We Japanese are very glad that the Crown Prince returned home on the third inst. with ruddy face in spite of his long journey.

Here is an interesting anecdote of H. I. H. the Crown Prince that gave Lloyd George a fright. When the Crown Prince called on the English premier's house, no sooner had he shaken hands with Mr. Lloyd George than he said, "How I longed for the peace of the world resting upon him. Instantly a smile appeared on Lloyd George's face, though he was an old sager and too old a bird to be caught with chaff, he seemed to be transported with joy."

"That's all"

1921-9-3

Hikone

Middle

School.

Fourth Year

B class

OMatsubana.

The, Crown Prince.

The Prince's visit to Europe especially to England after the great war was an unprecedented great achievement.



講演

日英米の海軍力に就て

寺垣 海軍中將閣下講演

—大正十年五月十三日午後一時半より—

エー私は只今御紹介を得ました寺垣であります。大正六年海軍協會と云ふものが組織されましたが、其の主意目的は郡長殿のお話し申された通りで、日本は島國でありますから、海と云ふことを寸刻も忘れてはなりません。其の海軍思想の普及如何は一國の盛衰に拘るものであります。英國は本國の面積は我國より小であります、今日あの様な大領土をしてゐるのは、何の力に因るのでありますか。其れは古いことはありません、百數十年前のことであります。其の以前は些少な本國のみで和蘭、西班牙、葡萄牙等の外國から非常な壓迫を受け、海が非常に大切なことを自覺し、小なる海國民が海を知らなかつたなら、英國は生命を失ふと考へ、苦心・苦心を重ねて、遂に海上の王となる基礎を作つたのであります。日本も地形がよく彼に似てゐます、英國の英吉利海峡を隔てゝ歐羅邑大陸に對してゐる

Since he started on she first journey, she auxieties of their majes-ties were better imagined than discribed, and also the lives of all nations were full of harasiug anxieties. But now we i feel uery happy that soon those have done changed to the most delightful joy by his return, enjoy-ing his usual excellent health,

I suppose it must have depened so much upon the glory of the Imperial throne and the protecting of the gods, but more upon the noble character and exalted ability of the prince,

His conduct during the journey was not always very strict, but almost at all times it was unconstrained and uninstructed, And during such a short time he had observed the customs and manners of all the people of each country, worenour by giving audience to many famous officers and noted statesmen, he had Learned both military and political affairs. Thus our national prestige has been raised all over the world and the relation of all countries are now growing in intimacy, Indeed, it was not merely a great matter of inter-national intercourse, but the best odchance for the Prince to display his surpassing talent ad high charactr, and it has been success-fully done, we feel very happy and glad when we shink that we shall be able to live and pass oow plevant lives under the reign of the Prince, asow sovereign in future, so, we Jaqanese first of all should express our sense of gratitude to the gods, then we should fe glad T. kobayashi

講演

三〇

のは、日本が日本海を隔てゝ支那に接してゐるのとよく似てゐます。さうでありますから、我々は海と云ふことを一日も忘れてはなりません。從來の英國政策の爲海は「コワイ」ものといふ習慣があるので今日まだ海軍思想が甚だ振はないのであります、海軍協會は此の思想が甚だ振はないのを遺憾に思つて此の思想を普及する爲に組織されたもので三千人以上の會員があります。其の十分の一は女であります從て評議員の中にも女の方があります、其の女は方は何れも地方の有力な方で、例へば女學校長下田歌子先生山脇先生等で皆女子高等教育を受けられた方々ばかりであります。家庭的に海軍思想を普及するのが本協會の目的であります。尚海軍省に御願ひ致しまして、其の事業其の場合に應じて、活動寫真等を用ひて面白く海上の事を知らすのが我々の目的であります。尙海軍省に御願ひ致しまして、艦隊の活動射撃、軍艦の參觀、便乗、或は海軍演習を見せて戴くのも本協會の事業の一つであります。本月は五月で、五月は海軍に居た者には忘れる事の出来ない月であります、即五月廿七日は日本海々戦の紀念日で、其の結果は古今の歴史にない、有史以來世界に誇るべき好結果を得たのであります。今後も斯かる好結果は外國には有るかも知れぬが、我が國には有りますまい。此の五月に於て、將來の日本を双肩に取つて立つべき青年諸君の前で、一條の海軍講話をなすといふことは、誠に私の光榮とする所であります。近頃軍備縮少の問題が我が國にも、西洋諸國にも起つて、新聞にも喧しく唱へられてゐますが、此れは非常に六ヶ敷いことで容易に論すべきことであります。併し、理想としては誠に結構なことであります。近頃大分具体的になつて、海軍縮少問題となつて來ましたが、海軍縮少の問題は、我が國の様な島國には、大なる關係があります。此れは國民一般の是非知らねばならぬ大問題であります。即此の四面海を以て圍まれた日本の國防は如何。

軍備の縮少は勢ひ陸海軍の二者に分れます、其の國の状況に因り、何れを先にすべきかは、國民の常に考へねばならぬことであります。陸海両軍の共に強大なのは誠に申分のないことであります、両方とも良いといふ事は先づ六ヶ敷いと思はれます。さうでありますから、國民は何れが必要であるかを判断せねばなりません。日本は何れを先にすべきか、其れは餘り六ヶ敷い問題でないと思ひます。日本は海を離れてはなりません。海は日本の生命であります。さうでありますから、海軍に關する御話といへばどうしても日英米の海軍について御話しなければなりません。日本は五大強國の一であります。國際聯盟で名譽ある五大強國の一となりました。然るに果して日本は英米佛と平等の勢力が有りませうさいから後の方はわからぬかも知れませぬが……海軍發展の關係圖と統計表に因り表にあることも繪で明瞭に示した物でありますから、お話の種として此處に掲げたのであります。さうでありますから、あの圖に就て今日、日本はどんな有様であるか、英米の海軍力の現在はどうであるかをお話しして、後で前刻申しました通り、本月は五月でありますから、バルチツク艦隊が日本に来て、苦心の末地獄に陥つ

て往生する話を致しませう。

此の上方の（圖ニテ示ス）第一番目は英國の本土、第二番目は日本、第三番目は米國で、海岸線の長さと面積とを表にしたものであります。日本の分は臺灣朝鮮を除き、英國のは歐洲にある本國のみでオーストラリヤ、アフリカ、カナダ、は入れてありません。面積は日本が十四萬方哩、英國は十二萬方哩、米國は紫色の此で（圖ニテ示ス）フィリピン、布哇ジャワ等は入つて居なくて、三百萬方哩、笠棒に大きいのであります。次に海岸線は日本が最も長く、英國は日本よく短く、米國は一層少であります。さうでありますから、日本は海を一番澤山持つてゐると云ふことが出来ます。列國中で日本は一番多く海を、有し、海の恵を最も多く受けて居ます。日本が天より受ける自然の恵は、世界に發展すべき道となり、海產物は世界に發展し得る天の恵であります。果して日本は天の恵に對して、之を利用し世界に發展して居るでありますか。今日迄の有様では一向努力せない様でなからうかと思はれます。さうでありますから、諸君が日本を本當の大日本帝國とするには、是非とも海を越へて發展せなければなりません。海の力が必要であります。自分さへ良ければ良いと云ふ様な引込思案では國家が貧弱になります。今日より一層世界に壓迫され、奴隸視され所謂有色人種は益々排斥せらるゝかも知れません、でありますから、我々は大いに國家を盛んにし、天壤無窮の皇運を扶翼し奉る様にして、日本を海岸線と共に世界第一等の國とせねばなりません。

第二番目の統計は鐵と石炭で、本土の年產額は假に、台灣を入れるにしても六十萬噸で、かなり大きい様だが、英米に比較すると左程ではありません。日本の石炭は三四十年で盡きてしまひます。でありますから今日では石油を用ひてゐますが、石油も日本には少く、工業に必要な動力の種となる物はありません。英國にても米國にても本土は工業が盛んで、領土は工業の原料が豊富で、其の使用の餘りの鐵石炭は外國へ輸出し、我が國にも來てゐます。さうしたならば日本はどうして發展すればよいか、日本は工業地であります。日本の發展は工業であります。工業の盛衰は日本の死活問題であります我が日本は絹糸銅は豊富でありますが、衣服の原料は甚だ貧弱であります。第三番目には衣服即ち日常必要な着物の原料であります。此の原料なる綿花羊毛の年產額の比較は日本は甚だ心細いもので「ナンニモナイ」「ゼロ」であります。して見ますと、現に我々が着てゐる着物は、どうして出來たのでせう。ラシャ木綿は何れも外國より原料が來るのであります。或は外國より原料品を持ち來ることの出來ない場合があるかも知れません。其の時もし日本が海上權を持つてゐなかつたら、我々は裸体にならなければなりません。衣服の様な大切な物が、日本にないとは非常に心細い次第ではありますか。英國も本國には綿花は零で、日本と同じであります。併し印度、加奈陀、濠洲等から來ます。工業に使用した餘りの綿花は、日本にも來ます。加奈陀からは綿も毛も來ますでありますから、英本國は日本と同じく綿も毛も零であります。少しも差支はありません。加之海には海上の王たる世界第一の海軍力を有して